

論がなされました。共同利用について、岡村定矩氏（木曾観測所）のまとめと問題点の指摘がありました。望遠鏡を有効に利用し後継者育成のために観測プログラムでの若手の観測プロポーザルの優先、レフリー制を含めた観測プログラム編成方法の再検討の必要性が強く指摘されました。

岡山観測所の望遠鏡・装置類を用いた（用いる）個々の研究・観測については、今回は、ポスター・セッションで行い 5 論文が提出されました。午後の 30 分間のポスターセッションの議論の時間には、各ポスターの前で発表者を囲んでの議論が行われました。

今回は、国立共同研への移行時期であり、共同利用についての各研究者の議論を深め、岡山観測所の共同利用のあり方を探るために、議論の時間を長くとりました。観測所が正式に共同利用になるにあたって、ユーザーズ・ミーティングは利用者の総意を反映する場としてますますその重要性をましてくるものと思われま（山下所長挨拶）。観測所の運用、機器開発についての議論がユーザーズ・ミーティングで活発になされ各種委員会に反映されることが期待されます。

27 日には、CCD に関する Work Shop が開かれました。既に、岡山観測所 188 cm 望遠鏡の観測 230 夜中 70 夜 (30%) が CCD を用いた観測であり、蓄積されつつある観測・整約ノウハウの交換と、今後の CCD 開発計画について議論をしました。

26 日の夕刻には、三シンポジウム共同の懇親会が鴨方町商工会館で開かれました。岡山ユーザーズ・ミーティングと CCD ワークショップの集録は別々に近日中に発行する予定です。

(佐々木敏由紀)

日米セミナー「太陽フレア物理」開催される

日本学術振興会と米国国立科学財団による日米セミナー「太陽フレア物理：進展のレビューと将来の展望」(Flare Physics: A Forward Looking Retrospective) は、4 月 7 日から 4 日間ハワイ大学の East-West Center で行われた。日本から 14 名、米国から 29 名、第三国から 4 名の参加を得て、フレア物理学の最近の進展と今後の研究計画について活発な討議が行われた。カルフォルニア大の Hugh Hudson 氏と私とが全体の世話役を、またハワイ大の Canfield 氏が現地での世話役を務めた。

太陽フレアに関する前回の日米セミナーは、1982 年東京で開かれている。1982 年は米国の SMM、日本の「ひのとり」両太陽観測衛星によるフレアの X・ γ 線観測が行われた直後で、新しい観測事実が次々に明らかにされ始めた時期であった。それから 5 年、多くの論文がすでに発表され、フレア物理の研究はめざましい発展を遂

げており、この間の成果を評価しそれをもとに今後の研究方針を討議することが、今回改めてセミナーをもつ目的であった。

セミナーの構成は、フレアの観測・理論に関する総合的なレビューにつづいて、異なる波長域で撮られたフレア像の比較・検討、高温プラズマの生成とダイナミックス、高エネルギー粒子の加速と閉じ込め、フレアと磁場の形状を主要なテーマとし、それぞれについて、成果の評価と最新の成果報告が行われた。講演数は約 40、そのほか約 20 のポスターによる発表が行われた。詳細は Solar Physics の特集号として近々刊行される予定である。

最終日は、次の太陽活動期にそなえた研究計画の発表と議論に当てられた。日本側からは SOLAR-A 衛星、電波ヘリオグラフ、太陽周期活動望遠鏡の諸計画が、米国側からはハワイ大の太陽観測拡充計画、Owens Valley の多周波干渉計、MAX '91 衛星等の諸計画が発表された。なかでも SOLAR-A 衛星計画は日米協力を一つの柱とするものであり、当然米国側から強い関心が寄せられている。宇宙研から同計画のマネージャーである小川原氏が出席して計画の現状等について報告したが、多くの質問が集中した。SOLAR-A への期待は大きい、フレア物理の研究は、データの総合と解釈の段階にきており、衛星観測と同様に、地上観測、理論の充実に力を注がなければならない。

(甲斐敬造)

お詫び

8 月号掲載の秋季年会会場付近の宿舍案内の資料は、誤って古いものを掲載してしまいました。御迷惑をおかけしたことをお詫び致します。

☆ ☆

☆ ☆ ☆